

アメリカ詩の研究

三宅昭良

あまりに古い話は知らない。しかし、少し古い話なら覚えている。1980年代のことだ。私は大学院に入ったばかりで、はじめて学会なるものに顔を出しはじめたばかりであった。アメリカ詩の世界では金関寿夫、沢崎順之助、新倉俊一、徳永暢三、高島誠などの諸氏が活躍しておられた。関西には児玉実英、三宅晶子、安川昱などの先生方がいらしたが、当時は知らなかった。私たちの世代はこうした眩いばかりの先生方を見上げながら、大学院で学んでいた。それが1980年代だった。金関先生の主催する「遊牧民の会」には原成吉氏を中心に多くの若い同世代の研究者が集まっていた。本欄の前任者である長畑明利氏も、その前の飯野友幸氏も同じ世代に属する。

そうした世代もいまは当時の先生方の年齢をこえた。学内外の要職をこなしながら多方面で活躍するものも多い。そのいっぽうで若い世代の頼もしい活躍もみられる。以下に草する一文がそうした歴史の変転の一齣をうつつ鏡の役割を果たせたら幸せである。

前置きはこのくらいにして、今年の収穫を見てゆこう。最初に取り上げるのは江田孝臣氏の『エミリ・ディキンソンを理詰めで読む——新たな詩人像をもとめて』（春風社2018年8月）である。私たちの世代のひとりが2005年以来の成果をまとめた書物である。

ここにいう「理詰めで読む」とは、著者によれば、「先入観を排して、徹底して字義と文法にこだわって読む」（6）ということである。その言葉どおり、氏は本書において、これまでの日本語訳やその注釈の読み方、〈葬儀空想説〉や〈恋愛詩説〉など通説とされる読み方では説明できない詩の細部の表現にこだわって大胆な仮説を提出する。書の最初の三分の一ほどはメタ・ポエム論である。もちろん、なるほどと思う読みも、説得されなかった読みもある。わけても詩中の「私」が〈推敲途上の詩〉であるという仮説はかなり大胆である。また、F719/J734とF268/J248には解決できない詩句が残されており（72-83）、歯切れが悪い（半面でそれは氏の誠実さの表れでもある）。

それに比して第6章から第9章の読解はたいへん手堅く、おおいに説得された。そのいっぽうで書中もっとも大胆なのはF547/J389を扱った第11章である。氏は“House”の多義性を手がかりに、ネクロフィリアの空想を読み取るのだ。ディキンソンがネクロフィリア!? そう思う読者は多いだろう。評者がかもっとも興奮しながら読んだのは「政治と科学」と題された第5部の第12章と第13章である。前者は先行研究を丁寧に咀嚼しながらディキンソンの「民主主義に対する不信感」と「貴族主義的

な矜持」(186)を詩の細部に読み取る。詩は市場原理に毒されてはならないと考える詩人が、「女友達の共同体」という文学空間に詩と手紙をささげるその姿勢は贈与交換の原理で説明できることを論証する。後者はディキンソンが学生時代から当時の地質学に通じていたことを実証的に調べあげ、F532/J403の材源を突きとめる論攷である。氏は最終的に、ディキンソンのなかにゲーリー・スナイダーやケネス・レクスロスと同様の「地質学的想像力」を駆使し得る可能性を感得し、アーマストがかつて湖の底だったことを暗示する詩をいまも探しているという。氏は徒労に終わるかもしれないと控えめだが(225)、成果の発表が待ち望まれる。

私たちより一回りほど年長の荒木正純氏が大著『『荒地』の時代——アメリカの同時代紙からみる』(小鳥遊書房 2019年2月)を発表した。これは途方もない本である。氏は詩人が読んだ材源の研究ではなく、詩人と同時代の人々を取り巻く言語文化環境とでもいうべきものの探求を目指し、「19世紀後半から『荒地』の出版される一九二二年までの歴大な合衆国の新聞記事」(12)から引用することで、それを浮かび上がらせる。かようなことができるのは、合衆国国会図書館が公開しているChronicling Americaの新聞アーカイブのおかげである。この手があったか！と膝を打つと同時に、このような手法を思いついた氏の発想の若々しさにも心を打たれた。

評者にとって『荒地』はいまでも謎だらけの詩だが、本書のおかげでそのいくつかが解けた。とりわけ感謝したいのは、「フェニキア人水夫」と「スミルナ商人」の謎である。当時の英語圏読者にとってこれらはどういうイメージを喚起したのか、ずっと疑問に思ってきた。

ただ、それでもこの大著に対する評価は分かれると思う。『荒地』の小さな詩句からはじまって、議論は当時の新聞紙面に入っていく、夥しくも長大な引用に次ぐ引用がなされる。たとえば、詩の冒頭の“April”をめぐるのは、ヘレン・ハント・ジャクソンの詩を解説した新聞記事から、そこに出てくる「リリアン・ラッセル」と或る小説への言及をまた別の新聞記事において追求し、そうして見つけた記事の隣に配置された「北極探検」の記事に注目し、次から次へと記事の「連鎖」を追いかけてゆく。記事の引用は数行で終わるときもあるが、長い時には2頁近くに及ぶときもある。こうしてこの大冊の相当な頁を当時の新聞記事の引用が埋めてゆく。

結局、本書はそのタイトルが示すとおり、『荒地』の「同時代」を当時の新聞記事から浮き彫りにした書物であって、『荒地』そのものを徹底的に読みぬこうとした本ではない。したがって論述は詩の片句に戻ってくることはほとんどない。膨大な新聞記事からの引用が示す「同時代」の様相を堪能するか、それを詩句への収斂の欠如した退屈な展覧とみるか。本書はその意味において読者を選ぶ書物である。

私たちの世代を代表する飯野友幸氏の『フランク・オハラ——冷戦初期の詩人の芸術』(水声社 2018年12月)はこの詩人を同時代の絵画と音楽、それに冷戦という政

アメリカ詩の研究

治環境を通じて論じたすぐれた著作である。それらは前著『ジョン・アッシュベリー』の第4章でも扱っていたが、氏は最新作でそれを本格的に論じている。

第1章では抽象表現主義の画家たちとの交友と距離、シュルレアリスムの影響、1940年代50年代のジャズなどを論じ、オハラの詩の即興性、再現性、連続と偶発などの問題を扱っており、第2章では、氏によれば、オハラが「ある意味では冷戦に加担していた」ことを示し、そのいっぽうで「ゲイの詩人として差別の犠牲者」(54)でもあったことを論じている。ただ、前者について、「ある意味で」とはどういう意味でなのか、氏の言葉でその微妙なニュアンスを説明してほしいとは感じた。もちろん丁寧に読めば了解できることであるが、それでもここは後者へと話題をうつす直前に筆者自身の言葉による総括が欲しいと思った。

第3章はオハラと音楽を扱っている。氏によれば、オハラにはジャズの影響は限定的であり、圧倒的なのは彼の愛したクラシック音楽、とりわけ20世紀にあってロマン主義の香りの濃厚な作曲家ラフマニノフと友人モートン・フェルドマンであるという。氏は、オハラはラフマニノフに対し「傾倒(そして私淑)」(109)していたと言い、「ラフマニノフの誕生日に」という「隠れた連作」を読んでいくのだが、この連作が「傾倒」からほど遠い「一貫性、計画性、テーマ性」(118)のなさを特徴とするところにオハラのオハラたる所以があるのだと理解した。また、後半ではジョン・ケージとちがひ、フェルドマンとオハラは固定された方法論と無関な放縦に身を任せる創作態度の中間にあって「方法論なき方法論」(127)にふたりの特徴があることを論証する。

第4章はオハラの詩学をロマン主義からエリオットを経てオルソンにいたる個性の問題のなかに位置づけており、大いに啓発的である。エリオットを論難するオルソンが「人間の卑小さ」(140)を力説する点で意外に前者に近いと喝破し、つづいて「彼らから一步離れて」、「わが感情を悼んで」などを読みながら、オハラの詩はパーソナルでありながら対象から距離を取って非個人的であると指摘し、さらには「並列的に展開しながらふいに円環的に終わる」(158)ところにエイブラムズのロマン主義のパロディを読み取る点など、「エピローグ」で詩人の歩行詩の特徴を「風に書く」(171)とまとめる冴えとともに、圧巻である。

単行本の最後として、私たちよりひと世代若い研究者の代表として、高橋綾子氏の『ゲーリー・スナイダーを読む——場所・神話・生態』(思潮社、2018年8月)をとりあげよう。本書は熱のこもった一書である。カリフォルニア大学の図書館の資料にあたり、詩人本人とも何度か電子メールのやり取りをおこない、インタヴューも敢行し、1950年代の詩作/思索から最新詩集『この現在という瞬間』(2015年)にいたる詩人の文学的活動を丁寧にたどる。鈴木大拙の著作や難解な道元の『正法眼蔵』に立ちかえって彼の仏教理解を究明する姿勢には感服した。スナイダーについては故金関寿夫氏から山里勝己氏、原成吉氏、重松宗育氏にいたる研究の伝統があるが、本書を読み

回顧と展望

ば、高橋氏はその伝統をしっかり受け継いでいることが分かる。

ただ、対象との距離が近すぎて説明不足と感じる点や、細大漏らさず取り込もうとしてキーワード過多に陥っているところが散見されるのは惜しまれる。たとえば、詩集のタイトルにもなっている「リップラップ」とは何か、簡単な説明があればよいと感じたし(後述の遠藤論文には言及がある)、スナイダーがなぜ寒山に惹かれたのかも教えてほしいと思った。神話、女性、自然生態、禅、それに波動、エネルギー、野生と野性、複式夢幻能、自然国家、生態地域主義運動などキーワードが継起的かつ反復的に出てくるのだが、それらが十分整理されて論じられているとは言いがたいときがある。また、第5章では『終わりなき山河』が「五重の入れ子構造」(167)になっているというが、論述のどこで何番目の「箱」をあけて次の「箱」に入ったのか分かりにくい。第6章では「塵」の意味は見事に解明されているが、「絶頂の危うさ」とは何かよく分からなかった。また、何度か出てくる「ディープ・エコロジー」と「デプス・エコロジー」の違いもはっきりしない。

最後の点は高橋勤氏の「異種混交の寓話——ゲーリー・スナイダーにおける野生の詩学」(『英語英文学論叢』第68号 2018年3月 九州大学)が明快に教えてくれる。『野性の実践』のなかの「熊と結婚した女」と「黄褐色の文法」からスナイダーの野生文化に共通の「文法」(11)を川の蛇行のイメージに読み取る論はスリリングである。

富士川義之ほか編『ノンフィクションの英米文学』(金星堂 2018年10月)に3篇のアメリカ詩の論文が掲載されている。「ノンフィクション」もまたフィクションの一形式であることは論を待たないが、この一点をおろそかにすると「フィクションとしてのフィクション」との境目が分からなくなり、何をとりあげてもいいことになる。山内功一郎氏の「「驚異の感触」を求めて——詩人フィリップ・ラマンティアの誕生」と遠藤朋之氏の「「地理的理想力」の継承——パウンド、ネイティヴ・アメリカンからスナイダーへ」はそれぞれに刺激的で興味深い論考だが、「ノンフィクション」という形式への視線がやや不足していると感じた。

その点で東雄一郎氏の「シルビア・プラスの可逆的遺書——ユダヤ人への変容」はそのタイトルが絶妙に示すとおり、『エアリアル』と『ベル・ジャー』における「虚構と現実」の「混和」(382)のさまを氏特有の濃密な文体で丁寧に解きほぐしており、読ませる。

翻訳に目を移すと、藤井繁訳『エミリー・ディキンソンの詩』(コプレス 2018年6月)と川本皓嗣編『対訳 フロスト詩集——アメリカ詩人選(4)』(岩波文庫 2018年8月)が挙げられる。ディキンソンについては、児玉実英氏が「エミリー・ディキンソンの詩・20篇」を紀要に発表しておられる。藤井訳は小林孝雄訳(松柏社 1986年5月)と選詩も訳文も似ていることが気になったが、簡潔で力強い訳詩である。対して児玉訳は自身の原詩体験にこだわりぬいて作った個性的な労作であり、このこだわり

アメリカ詩の研究

が心に残る。先に取り上げた江田氏の本も丁寧な解釈の付されたアンソロジーと見ることが出来る。昔から感じていたが、氏はすぐれた詩の翻訳者である。今回も例外ではない。

フロストについては藤本雅樹氏の『ボストンの北』と『少年の心』(国文社 1984年、85年)があるが、川本氏の仕事も優れている。とりわけ二人の句読点の有無(藤本訳には句読点がない)と代名詞の訳し方の相違が興味深い。(たとえば、“Home Burial”だと、藤本氏は「お前／僕」、川本氏は「君／ぼく」.)

飯野氏の先述の本には付録として「フランク・オハラ詩選」がついており、8篇の訳詩が収録されている。これらが見事な訳で素晴らしい。

機関誌に移ろう。『The Emily Dickinson Review』、『ホイットマン研究論叢』、『T. S. Eliot Review』、『Ezra Pound Review』に目を通したが、もっとも充実していたのは『Ezra Pound Review』であった。パウンドとフロストの交友を活写した藤本雅樹氏の講演録、読み応えのあるシンポジウムの報告3本(藤巻明、江田孝臣、長畑明利の各氏)、それに岩川倫子氏の“A second time? why?—Ezra Poundの“Canto I”における音楽的実験」とAndrew Houwen氏の“The Japanese Sources of Ezra Pound’s ‘In a Station of the Metro’”が掲載されている。(おまけのようなものとして拙訳「詩篇100のための補遺」も。)岩川論文は詩人の誤訳とされてきた一行に韻律的実験を読み取る刺激的な一本であり、Houwen氏の論は有名な二行詩のソースをめぐり、先行研究を徹底的に検証して通説をくつがえす注目の論文である。

紀要論文についても触れたいところだが、誌面が尽きた。十数本に目を通したが、なかで吉田要氏の「シルヴィア・プラスのタロット——“The Hanging Man”の行方」(『artes liberales』第29号 2019年3月 日本工業大学)が印象深かった。6行しかないこの詩のなかに折りたたまれた重層の意味を読み取るために、詩語の一語一語を大切にしながら、詩人のタロット・カードへの傾注、結婚生活の苦悩、*Bell Jar*など他の作品との関係、プロメテウスやイエス・キリストなどのアリュージョン、音の構成など、丁寧かつコンパクトに論じた堅実な佳作である。

こうして見てくると、冒頭でふれたとおり、若い世代の活躍も着実にある。今回は高橋氏、山内氏、遠藤氏、岩川氏、Houwen氏、吉田氏に触れたが、ほかにも優秀な書き手は多々いることを知っている。次回はそうした人たちの研究がこの欄を飾ることを期待してやまない。

(首都大学東京教授)